

## < 道徳部会 >

### I 研究主題

「道徳的価値及び人間としての生き方についての自覚を深める道徳の時間の指導と評価の在り方」

### II 研究の概要

今次の学習指導要領の改訂においては、学校教育全体で取り組む道徳教育のかなめとしての道徳の時間の役割と重要性が強調され、その特性を一層明確にするため、「道徳的価値」の自覚を深めることを加え改善が図られた。

そこで、標記の研究主題を設定して、生徒が道徳的価値の自覚を深めるような道徳の時間の授業展開の工夫について研究を進め、生徒の道徳的価値に対する深まりをとらえるとともに、教師の指導法の改善に資する授業評価の一方法の開発を試みた。

研究の方法としては、「道徳的価値の自覚」について押さえておく3つの事柄（後述）に基づき、授業における評価の観点を明らかにし、授業中の生徒の発言を中心とした授業記録及び中心場面でのワークシートの記述を基に分析を行い、追究した。

### III 研究の内容

#### 1 研究の基本的な考え方

##### (1) 道徳的価値及び人間としての生き方についての自覚を深める指導

道徳的価値の自覚について、「中学校学習指導要領 解説―道徳編―」（以下「解説」と略記）及び「中学校 心に響き、共に未来を拓く道徳教育の展開（文部科学省）」に、「発達に応じて多様に考えられるが、次の3つの事柄を押さえておく必要がある」として、以下が挙げられている。

- ア 道徳的価値を理解すること
- イ 自分とのかかわりで道徳的価値がとらえられること
- ウ 道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われること

また、この3つの事柄は、「道徳的価値の自覚に至る認識の構造をなしている」とも述べられている。

そこで、本部会では、上記のアからウまでの3つの事柄を踏まえた発問構成や終末の工夫など、道徳の時間の指導過程を工夫することで、道徳的価値の自覚の深まりをとらえることができるのではないかと考え、研究を進めた。

##### (2) 道徳教育における評価

「解説」には、教育における評価について、「生徒にとっては自分の成長を振り返る契機となるものであり、教師にとっては指導計画や指導方法を改善する手掛かりとなるものである。」とあり、さらに「生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、

指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること」と示されている。また、道徳教育における評価については、「生徒の道徳性については、常にその実態を把握し指導に生かすように努める必要がある。」とあり、「道徳教育の評価についても、生徒自身による自己評価を生かして新たな目標への努力を支援するとともに、生徒の道徳的なよさや道徳的成長に対する共感的な理解に基づいて指導計画や指導方法を評価し、その結果を指導の改善に生かしていくこと」を求めている。

したがって、道徳教育の評価は、教師が生徒の人間的な成長を見守り、よりよく生きようとする努力を評価し、勇気づける働きをもつものであると考える。

## 2 研究の内容と方法

本部会では、上記の基本的な考え方を踏まえ、道徳的価値の自覚を深めるための3つの事柄に基づいて発問を吟味し、指導過程を構成するとともに、生徒の発言やワークシートの記述などについて各授業における評価の観点を作成して分析を行った。

### (1) 「道徳的価値の自覚を深めるための3つの事柄」に基づいた指導過程の構成

「中学校 心に響き、共に未来を拓く道徳教育の展開（文部科学省）」に基づき、道徳的価値の自覚を深めるための3つの事柄を以下のようにとらえた。

#### ア 道徳的価値を理解すること

生徒は、道徳の時間で、資料中の登場人物の行為やその時間で発表される他の生徒の発言などを手がかりに道徳的価値を理解する。その際、生徒の認識能力や心情等の発達によって道徳的価値を理解する深まりは異なる。しかし、道徳的価値の理解の基盤にあるのは、生徒各自の体験であり、その体験を通してはぐくまれたものの見方、考え方、感じ方である。道徳的価値を理解することは、人間としてどうすればいいのかという人間理解につながる。さらに、道徳の時間の資料を基に他の生徒の考えを知ったり、他の生徒の考えを自分のそれと比較したり吟味したりすることを通して、他者理解を深めることができる。つまり、人間理解や他者理解を深め、人間としての生き方について考えを深めることであると考え、それを評価する観点を定めた。

#### イ 自分自身とのかかわりで道徳的価値がとらえられること

生徒は、上記の人間理解、他者理解を踏まえて、自己理解を深める。自分自身とのかかわりで道徳的価値をとらえることは、ねらいとする道徳的価値を生徒自身が自らに問いかけ、人間理解や他者理解を踏まえながら、自分のこととして考えることである。つまり、このように、生徒が自分なりに道徳的価値をとらえ直すことを通して、自己理解を深めることであると考え、それを評価する観点を定めた。

#### ウ 道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われること

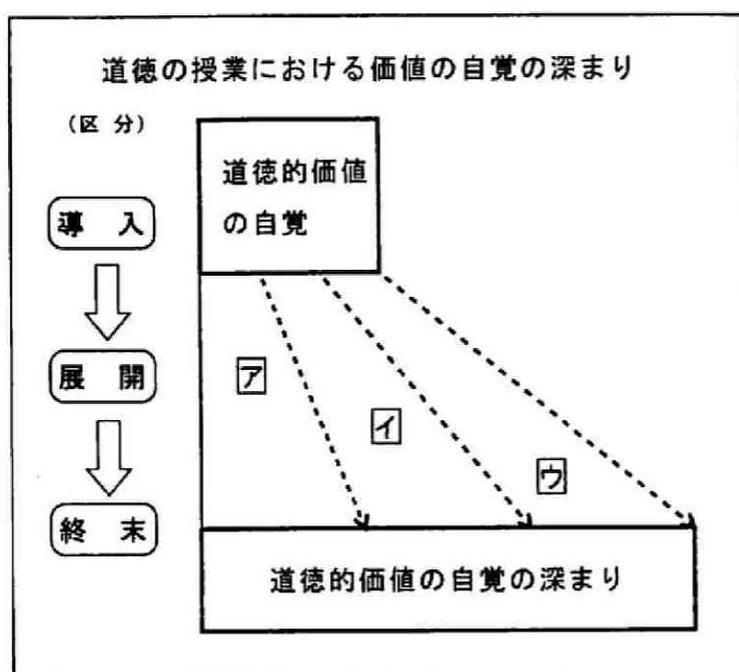
よりよく生きたいという思いには、自分が生きていく上での課題など、これからの自分自身の生き方につながっていく発展的な思いや課題を見いだしていくことが必要である。つまり、道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題を培うことは、道徳的価値が自分自身の生き方と具体的にどうかかわるかを見いだすことであると考え、それを評価する観点を定めた。

ただし、アからウまでの3つの事柄を、道徳の時間の指導過程の中に機械的に割り振る

ことではない。道德の時間の資料を基に、生徒が主体的に考えたり、他の人の意見を聞いて自分の意見と比較したり、自己の内面に目を向けるなどの活動を通して、道德的価値の理解や「人間理解・他者理解」から「自己理解」へ、「自己理解」から「自己の課題の発見」へという思考の流れを踏まえた指導過程を構成する。

## (2) 道德的価値の自覚の深まり

本部会では、アからウまでの3つの事柄を踏まえ、道德の授業における価値の自覚の深まりを下の図のように考えた。



授業を行う前の段階においても、生徒はこれまでの学習や生活経験から、それぞれ固有に道德的価値について自覚をしている。そこで、この図では、アからウまでの3つの事柄を踏まえた指導過程を工夫することにより、授業後に生徒の道德的価値の自覚が一層深まっていく様子を表している。

本研究では、このように、指導過程の工夫を図っていくこととする。

## (3) 評価の観点

2つの検証授業において、生徒の道德的価値の自覚の深まりをとらえる評価の観点を、それぞれ以下のように設定し、授業後に分析を行った。

	事例 1	事例 2
(主題名)	信頼・友情	生きる喜び
(内容項目)	内容項目 2-(3)	内容項目 3-(3)
(資料名)	「いつも一緒に」	「偽りのバイオリン」
ア 道德的価値を理解すること	真の友情や友情の尊さを理解しているか。	人間は内に弱さや醜さをもつと同時に、強さや気高さを併せもつことを理解しているか。
イ 自分とのかかわりで道德的価値がとらえられること	「信頼・友情」という価値が、自分にとってどういうことなのかを考えているか。	「弱さや醜さを克服し生きる喜びをもつ」という価値が、自分にとってどういうことなのかを考えているか。
ウ 道德的価値を自分なりに発展させていく思いや課題が培われること	「信頼・友情」という価値が、自分自身の生き方と具体的にどうつながるかを考えているか。	「弱さや醜さを克服し生きる喜びをもつ」という価値が、自分自身の生き方と具体的にどうつながるかを考えているか。

#### IV 指導事例

##### ◇事例1 (第1学年)

本事例は、「道徳的価値の自覚」を深めるために押さえておく3つの事柄に基づいて発問を吟味して指導過程を構成するとともに、授業中の発言や観察及び授業記録の分析から道徳的価値の自覚に対する深まりをとらえようとするものである。

- 1 主題名 「信頼・友情」(内容項目2-(3))
- 2 ねらい 心から信頼できる友達をもつことの大切さを理解し、友情を育てていこうとする態度を養う。
- 3 資料名 「いつも一緒に」(文部省 道徳教育推進指導資料(指導の手引き)2・平成2年)
- 4 資料の概要

真理子は、仲良しだったみゆきがバレーボール部のレギュラーになったときから、以前のように素直に振る舞えなくなる。真理子は、同級生の恵子たちの誘いによって、みゆきを無視し、みゆきの訴えにも心を閉ざす。しかし、恵子の友人評を通して、自分にとって本当の友達とは何かを考える。

##### 5 価値の自覚を深めるための工夫

本授業では、道徳的価値の自覚を深めるための3つの事柄「ア 道徳的価値を理解すること」、「イ 自分とのかかわりで道徳的価値がとらえられること」、「ウ 道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われること」を、順を追って生徒が考えることができるように発問を設定した。しかし、日常生活の体験等の違いにより「ア」と「イ」が同時に起こる生徒もいれば、「イ」と「ウ」が同時に起こる生徒もいると考えられる。そのため、下記の「発問の意図」については、おおよその目安と考えて、指導過程を構成した。

発問の意図	
発問 1	<p>(発問1)真理子がみゆきに「なによ。私はあんたの宿題係じゃないんだよ。自分でやってよ」と強く反発したのは、本当はどのような気持ちからですか。</p> <p>➡ <b>ア 道徳的価値を理解すること</b></p> <p>* 友情は大切なものであるが、反面、壊れやすいものでもあることを考えさせる。</p>
発問 2	<p>(発問2)真理子はどんな気持ちから一緒に帰ろうという恵子の誘いを断ったのですか。</p> <p>➡ <b>イ 自分とのかかわりで道徳的価値がとらえられること</b></p> <p>* 「信頼・友情」という価値が、自分にとってはどういうことなのかを考えさせる。</p>
発問 3	<p>(発問3)この出来事を通じて、真理子の心の中で、「友達」という言葉はどのような意味をもつようになったと思いますか。</p> <p>➡ <b>ウ 道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われること</b></p> <p>* 「信頼・友情」という価値が、自分自身の生き方とどうつながるかを考えさせる。</p>

## 6 授業記録から

### ア 道徳的価値を理解すること

(観1) 真理子がみゆきに「なによ。私はあんたの宿題係じゃないんだよ。自分でやってよ」と強く反発したのは、本当はどのような気持ちからですか。

生徒A 真理子は、レギュラーになったみゆきがうらやましいと感じたと思います。

生徒B きっと、真理子はみゆきが当然のように考えていることに腹が立ったから。

\*友情という価値は大切なものであるとわかっていながらも、感情の行き違いや考え方の違いからきしみを生ずると壊れやすいものであることに気づいた。

### イ 自分とのかかわりで道徳的価値がとらえられること

(観2) 真理子はどんな気持ちから一緒に帰ろうと言う恵子の誘いを断ったのですか

生徒C 真理子と恵子の関係は、真理子とみゆきの関係とは違うと思います。

教師 どういうふうに違うと思ったのですか。

生徒C 真理子は、みゆきには何でも話せるけれど、恵子とはそういう関係ではないと思います。真理子は、みゆきといると安心できるような関係だと思っています。

教師 どうして安心できるのでしょうかね。

生徒C いつも一緒にいて、その中で育ってきたものがあるから。親友になるにはそれなりの時間をかけて、友情を大切に育てていかなければいけないと思います。

\*生徒Cの発言に対して、教師が「どういうふうに違うと思ったのですか。」と反問したところから、授業が大きく展開した。教師の適切な問い返しによって生徒の意識が自身の内側に向かって深まり、心から信頼できる友人関係とはどのようなものかについて「自分とのかかわりで道徳的価値をとらえられること」ができた。

### ウ 道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われること

(観3) この出来事を通じて、真理子の心の中で、「友達」という言葉はどのような意味をもつようになったと思いますか。

生徒D 友情は壊れやすいから、互いが互いのことをきちんと考えて育てていかなければならない。そうしないと本当の友達はできない。

生徒E 本当の意味での友達はそんなにたくさんできないかも知れない。でも、これから時間をかけて自分にとって一生の友達となる人をできるだけ多く作りたい。

\*あらためて「友達」について問い、真の友情や友情の尊さを自分自身の生き方とつなげるように考えを深めさせた。時に、感情の行き違いや考え方の違いから生ずる人間関係のきしみを、互いに励まし合い忠告し合える信頼関係によって克服し、真の友情を構築していこうとする思いや課題が培われたことがうかがえる。

## 7 まとめ

この授業では、互いの信頼に基づいた「真理子とみゆき」の関係と、表面的な「真理子と恵子」の関係との違いに気づかせることが、道徳的価値の自覚を深める上で重要である。この違いに気づくためには、「真の友情」という価値を深く理解していなければならない（参照「発問の意図ア」）。この違いに気づいたとき、生徒はこれまでの自己を振り返り、心から信頼できる友人関係とはどのようなものかを考え始め（同「発問の意図イ」）、信頼と尊敬に支えられた友情をはぐくんでいこうとする思いが生まれる（同「発問の意図ウ」）。

### ◇事例2〈第3学年〉

本事例は、「道徳的価値の自覚」を深めるために押さえておく3つの事柄に基づいて授業における評価の観点を明らかにするとともに、授業中の観察及び生徒のワークシートの記述内容の分析から、道徳的価値の自覚に対する深まりをとらえようとするものである。

- 1 主題名 「生きる喜び」（内容項目3-(3)）
- 2 ねらい 人間には、弱さや醜さもあるが、それを克服して生きがいを求めようとする勇気や気高さに気づいて人間としての誇りを大切に生きていこうとする態度を育てる。
- 3 資料名 「偽りのバイオリン」（自作）
- 4 資料の概要（後述）  
バイオリン作りの名人であるフランクには、ロビンという腕のいい弟子がいた。ある日、注文を受けたバイオリン作りが間に合わなくなったフランクは、ロビンが作ったバイオリンを自分が作ったように偽って売ってしまう。しかし、そこから、フランクの苦悩が始まる。
- 5 価値の自覚を深めるための工夫

発 問 の 意 図	
発 問 1	<p>(発問1)弟子のロビンのラベルをはがし、自分のラベルを貼ってしまったとき、フランクはどのような気持ちになりましたか。</p> <p>➡ <b>ア 道徳的価値を理解すること</b></p> <p>*人間は強さや気高さをもつが、反面、心の中には弱さや醜さをもつものであることを考えさせる。</p>
発 問 2 ・ 3	<p>(発問2)フランクが日夜胸を痛め悩み続けていたとき、どんな気持ちでしたか。</p> <p>(発問3)ロビンに手紙を出したフランクは、なぜさわやかな気持ちになれたのですか。</p> <p>➡ <b>イ 自分とのかかわりで道徳的価値がとらえられること</b></p> <p>*「弱さや醜さを克服し生きる喜びをもつ」という価値が、自分にとってはどうということなのかを考えさせる。</p>
発 問 4 ・ 5	<p>(発問4)フランクにとって、自分を取り戻す旅とはどういう旅だと思いますか。</p> <p>(発問5)今日の授業を通して、どんな感想をもちましたか。</p> <p>➡ <b>ウ 道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われること</b></p> <p>*「弱さや醜さを克服し生きる喜びをもつ」という価値が、自分自身の生き方とどうつながるかを考えさせる。</p>

## 6 ワークシートの記述から

### ア 道徳的価値を理解すること

(疑問1)弟子のロビンのラベルをはがし、自分のラベルを貼ってしまったとき、フランクはどのような気持ちになりましたか。

生徒A 今まで妥協せずに打ち込んできたので、情けない気持ちでいっぱいでした。

生徒B 客のバイオリニストをがっかりさせたり、自分の価値を下げたくないから、心は罪悪感でいっぱいだったけれど、開き直ってしまったと思います。

\*人間は、時には罪悪感をもちながらも、自分の心の中の弱さや醜さに流されてしまいがちであることに気づいたことが見受けられる。

### イ 自分とのかかわりで道徳的価値がとらえられること

(疑問2)フランクが日夜胸を痛め悩み続けていたとき、どんな気持ちでしたか。

生徒C 自分の弟子のロビンに申し訳ない気持ちと師匠として情けない気持ちでした。

生徒D 一日でも早く、ロビンに本当のことを言って謝りたいと思っても、なかなか口に出せなくて、毎日毎日同じ思いでとても苦しんでいたと思います。

生徒E ロビンに対しての罪悪感でいっぱい、だからこそ話せないでいる自分へのいらだちを感じていたと思います。

(疑問3)ロビンに手紙を出したフランクは、なぜさわやかな気持ちになれたのですか。

生徒F 正直に言うことで自分の気持ちを伝えることは、とても大切なことだと思います。しかし、わたし自身にとってはとても難しく、とても辛いことです。

生徒G 本当のことを言えずにいたけど、ロビンへの手紙をきっかけに、誰にどう思われようと本当のことは言わなければならないと、胸のつかえがおりたから。

生徒H ロビンが許してくれるかは分からないけれど、自分の気持ちに嘘をつかずに言えたからだだと思います。わたしは、人間は、自分の心には嘘をついてはいけないし、嘘をつけないものだと思います。

\*生徒Fや生徒Hの記述からは、「弱さや醜さを克服し生きる喜びをもつ」という価値が、自分自身にとってはどういうことなのかを考えていることが見受けられる。弱さや醜さを克服するきっかけが何であるかについて考え、「自分とのかかわりで道徳的価値をとらえられること」ができていると考えられる。

### ウ 道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われること

(疑問4)フランクにとって、自分を取り戻す旅とはどういう旅だと思いますか。

生徒I 失ったプライドや自分の気持ち、曲がってしまった自分の信念をもう一度取り戻すための旅だと思います。

生徒J これからもっといいバイオリンを作っていこうとする決意の旅だと思います。

〔発問5〕今日の授業を通して、どんな感想をもちましたか。

- 生徒K 人は、少し道を間違えても、誰かの一言で立ち直ったり、誰かに助けられたりすれば、また元の道に戻ることができるんだなあと思いました。
- 生徒L わたしは、フランクのようにはなれない。嘘をついたことは何回もある。だから、人にいやな思いをさせる、つらい思いをさせる嘘はつかないようにしたい。また、自分のやったことに対して責任をとることを大切にしたいです。
- 生徒M わたしは、一度失敗してもそこから立ち上がれるか、自分に勝てるかが一番大切だと思います。これから、もっと自分を磨きたいと思いました。
- 生徒N 人には欠点もあるけれど、いい点もある。嘘を通せば、他の人はそのうち忘れてしまっても、自分の心の中ではずっと引っかかっているものと思います。
- 生徒O 人間は、自分の良心には逆らえないと思います。

\* 「弱さや醜さを克服し生きる喜びをもつ」という価値が、自分自身の生き方とどうつながるかを考えさせた。その結果、自分の弱さや醜さに真摯に向き合うとともに、人間としての誇りや気高さをもって、自らを奮い立たせるような生き方をしようとする思いや課題が培われたことがうかがえる。

## 7 まとめ

道徳的価値を深めるための3つの事柄「ア 道徳的価値を理解すること」、「イ 自分とのかかわりで道徳的価値がとらえられること」、「ウ 道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われること」を、順を追って生徒が考えることができるように発問を設定し、ワークシートに記述させた。そして、授業中の観察及び生徒のワークシートの記述内容の分析から、道徳的価値の自覚に対する深まりをとらえようとした。

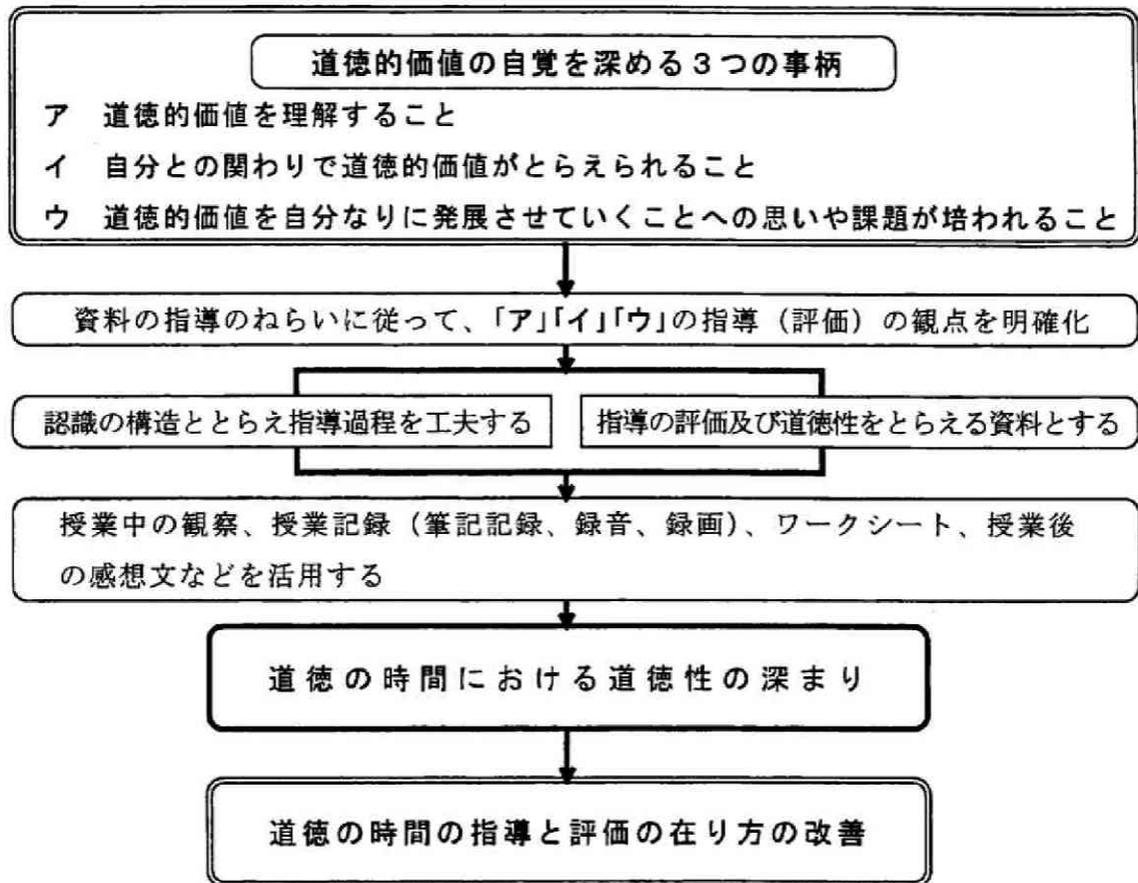
道徳の授業では、資料に描かれている登場人物の生き方を話題としながら話し合うなどして、道徳的価値の自覚を深めていく。しかし、「ア」「イ」「ウ」にそれぞれ設定された発問に対して、その時その時の行為のみに視点がおかれている生徒の記述からでは深まりは十分ではない。そこで、本授業の終末で、まとめの感想を記述する（発問5「今日の授業を通して、どんな感想をもちましたか。」）中で、生徒の道徳的価値の自覚が一段と深まっている様子をとらえることができるようにした。

この授業で、道徳的価値の自覚を深める上で重要なことは、人間が弱さや醜さをもつものであることを理解していなければならない（参照「発問の意図ア」）ことである。このことに気付いたとき、生徒はこれまでの自己を振り返り、「弱さや醜さを克服し生きる喜びをもつ」という価値が自分にとってはどういうことなのかを考え始め（同「発問の意図イ」）、弱さや醜さを克服し真摯に生きようとする思いが生まれる（同「発問の意図ウ」）のである。

## V まとめと今後の課題

### 1 まとめ

「道徳的価値の自覚」について押さえておく3つの事柄に基づき、道徳の時間における指導と評価の研究に、下記のような方法で2つの指導事例を基に取り組んだ。



このような研究に取り組んだ成果として、以下のことが挙げられる。

- (1) 授業者が、ねらいとする道徳的価値の自覚を深めるための3つの事柄に基づいた観点から、発問や指導過程等、授業を構想する一つの方法を明らかにすることができた。
- (2) 道徳の時間における道徳的価値の自覚の深まりを、評価の観点に基づいてとらえることができた。また、このことにより、生徒の道徳性を多面的に把握するための一つの資料とすることができ、生徒理解へと効果的に発展させることができた。
- (3) 授業後、道徳的価値の自覚を深めるための3つの事柄に基づいて授業記録やワークシートの記述等を分析したことにより、ねらいとする価値に対する生徒の見方、感じ方、考え方を把握したり、指導の一つの評価方法を明らかにすることができた。

### 2 今後の課題

- (1) アからウまでの3つの事柄に基づいて作成した評価の観点は、同じ内容項目であっても、資料や指導過程等に応じてさらに具体的に設定するなど、今後とも研究を深めたい。
- (2) 道徳性の評価及び道徳の時間に関する評価について、ここでは主として授業中の生徒の発言やワークシートの記述を用いたが、資料収集を多様にしその活用方法に検討を加え、指導と評価の在り方を改善していく手掛かりとしたい。

## 偽りのバイオリン

その昔、ドイツのプレーメンという町のはずれに、バイオリンを作る工房がありました。そこでは、フランクというバイオリン作りの名人がせっせとバイオリン作りに動んでいました。当時はまだ、機械で作るといってもなくすべて手作りで一ツ一ツ丁寧に仕上げられていました。仕上がったバイオリンの内側には作者の名前の入ったラベルを貼ることになっていたのですが、フランクのバイオリン作りは決して妥協を許さず、納得のいかない出来のバイオリンにはフランクの名のラベルを貼ろうとしませんでした。フランクという名が入ったバイオリンは遠くからわざわざ買い求めにくる人もいるほどでした。

一人でコツコツとバイオリン作りに動んでいたフランクの元にも、しだいに弟子達が集まってきました。その中の一人にロビンという弟子がいました。ロビンはフランクのバイオリンの音色にあこがれ、遠くボヘミアの地からフランクの技を学び取ろうとやってきたのでした。ロビンはバイオリン作りに対する情熱も、才能も際だって他の弟子よりありましたが、自分に厳しいフランクは弟子達にも厳しく、ロビンのラベルをバイオリンに貼ることをなかなか許しませんでした。

十年の歳月が流れ、ロビンのバイオリン作りは努力が実り、円熟してきました。そしてとうとう、フランクからロビンの名がはいったラベルを貼ることを許されたのです。ロビンのバイオリンはフランクのものと同じくらい素晴らしい仕上がりのバイオリンでした。ロビンはフランクに認められたうれしさから、ますますバイオリン作りに熱が入っていききました。

そんなある日、ドイツの著名なバイオリニストが、フランクバイオリンのうわさを聞きつけ、フランクを訪ねてきました。一週間後の演奏会でどうしてもフランクの作ったバイオリンで演奏したいというのです。いくらフランクでもバイオリンが仕上がるまでは最低でも一ヶ月は必要です。しかも、フランクの名の入ったバイオリンは飛ぶように売れてしまうのです。ストックは一つもありません。フランクは迷いました。フランクにとって、夢のような話です。演奏会が成功すればフランクの名はドイツ中、いや世界に広まるかもしれない。二度とこんなチャンスは訪れないだろう。色々なことがフランクの頭の中を駆けめぐりました。そして、あこがれのバイオリニストが自分の作ったバイオリンで演奏している光景を想像した瞬間、「わかりました。お引き受けしましょう。」と答えてしまいました。それからのフランクは、食事もなく、徹夜の日々でした。何かにとりつかれたようにひたすらバイオリン作りに動みまわりました。そして、約束の当日、フランクは大きなため息を漏らしました。どうしても間に合わないのです。夜も白々と明けてきました。フランクはひとり工房の中、途方にくれて呆然と座り込んでしまいました。約束の時間は、刻々とせまってきました。朝日が工房に差し込み、ちょうど工房に飾ってあるロビンの作ったバイオリンにあたっていました。それをぼーっと見つめているうち、フランクはロビンの作ったバイオリンに手を伸ばしていました。そして、ロビンのラベルをはがし、フランクのラベルをきれいに貼ってしまったのです。

その日、約束の時間にバイオリニストはやってきました。フランクはもったいぶりながらケースからバイオリンを取り出すと、バイオリニストに手渡しました。「とってもいい出来ばえです。どうぞ、ご覧ください。」バイオリニストはバイオリンを手にするやいなや弾き始めました。すると、工房は一瞬時間が止まったかのようでした。工房の弟子達は、思わず手を休め見事な音色に聞き惚れてしまいました。ロビンはそれが自分の作ったバイオリンであることにすぐに気がつきましたが、その場の雰囲気のためか、声が出ませんでした。

「これは、すごい。逸品だ。」そう言い残すと嬉しそうにバイオリンを手にして工房を後にしました。

演奏会の当日、フランクとロビンの姿が会場の片隅にありました。演奏後、会場は大きな拍手で包まれ、いつまでも途絶えることはありませんでした。大成功を収めたのです。フランクは終始、じっとバイオリニストの持つバイオリンを見つめていましたが、フランクの姿と象徴的にロビンの目にはなぜか涙があふれていました。

フランクの元にはバイオリニストからお礼の手紙とともに巨額のお礼金が届きました。さらに、バイオリニストの使ったバイオリンは、フランクのものであってドイツ中で有名になり、注文が殺到するようになりましたが、フランクの心は重く、芯から喜ぶことができませんでした。そして、一日も早くロビンに本当のことを話さなければいけないと思いながら、言い出せずに日夜胸を痛め続けていました。

演奏会での感動もだんだん醒めてきた頃、工房を訪れた客はフランクのバイオリンより、むしろロビンの作ったバイオリンを選ぶようになっていきました。こちらの方が、演奏会のあのバイオリンの音だということです。

演奏会が成功して、フランクの工房も弟子が増え、順調にバイオリンも売れ、生活も裕福になったのですが、フランクは活気に満ちたバイオリン工房の中、弟子達のバイオリン作りを何も言わず、ぼーっと見て過ごす日々が多くなっていきました。注文に間に合わなければ、出来のいい弟子達のバイオリンにフランクのラベルを貼ってしまうこともしばしばありました。フランクは全く自分を見失っているかのようでした。

ロビンはそんなフランクを見ていらませんでした。日に日に元気をなくしていくフランクを見ているうち、ロビンは故郷のボヘミアの地へもどり、自分のバイオリン工房を開く決心をしたのでした。

ロビンは自分の工房を持ち、何かがかげ切れたかのようにバイオリン作りに情熱を燃やしはじめました。来る日も来る日も自分の音を求めて、真摯にバイオリン作りに動みまわりました。気に入らない出来のバイオリンには、決してロビンのラベルを貼ることはありませんでした。たちまち、ロビンのバイオリンはボヘミアの地でも有名になりました。

一方、ロビンのいなくなったフランクのバイオリン工房は、衰退の一途を辿っていました。というのも、フランク工房のバイオリンは粗悪なものが多いという評判がたちはじめってしまったのです。そんなある日、フランクのもとへ一通の手紙が届きました。ロビンからです。「私はフランクさんのバイオリンの音色に憧れ、フランクさんの元でバイオリン作りを修行できたことは、私の生涯の中で、宝物を手に入れたようなものです。今でも、フランクさんの音を求めて、バイオリン作りに動んでいますが、まだフランクさんの音を越える私の作品はひとつもありません。……」という内容でした。その手紙を読み終わると、フランクの目頭は熱くなっていました。

そして、フランクは煙が切れたように重くのしかかっていた心の中のものを吐き出すかのようにすべてのことを手紙に書いてロビンに出しました。フランクの心はなぜか、今日までの積もり積もった自責の念が吹っ切れたようにさわやかな気持ちになりました。

それからのフランクは弟子達を独立させて、たった一人で再び、バイオリン作りに動むようになっていきました。気に入らない出来のバイオリンには、決してフランクのラベルを貼ることはなくなりました。

それからまもなくして、フランクに夢のような話が舞い込んできました。再びバイオリニストがフランクを訪ねてきたのです。来年のコンサートはフランクの新作のバイオリンで演奏したいとのことでした。

フランクにとって自分を取り戻す旅の始まりでした。